群馬大学ダイバーシティ推進センター

まゆだま通信

News Letter

■発行
国立大学法人群馬大学
ダイバーシティ推進センター

〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町4-2
TEL: 027-220-7146
FAX: 027-220-7143
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

2021.3
vol.25

大学幹部・管理職向けFDセミナー(兼ワーク・ライフ・バランス講座)開催

令和2年11月19日、荒牧キャンパスにおいて、大学幹部FD兼ワーク・ライフ・バランスを講座を開催しました。講師にはNPO法人コヂカラ･ニッポン代表・NPO法人ファザーリング･ジャパン理事 川島高之氏をお招きし、「ダイバーシティとはなにか？－新しい働き方、マネジメント、そして人生－」をテーマにお話しいただきました。会場では学長並びに大学幹部等24名が参加し、ワーク・ライフ・バランス講座も兼ねてリモートで49名の教職員が参加しました。

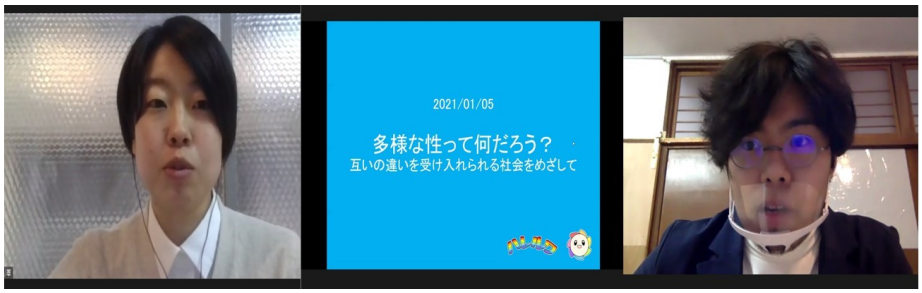
講座の中では、ワーク・ライフ・ソーシャルを充実するために、働き方改革・長時間労働の是正が必要であり、そのキーパーソンとして「イクボス」の存在が重要であると語られました。男性主体の組織よりも多様性のある組織の方が新しいモノや考えが生まれること、部下の私生活に配慮できるボスが求められることなどが語られました。その中でも部下を信じ、「仕事を任せる」、「やらないことを決める」覚悟、「仕事の断捨離」の決断、「ブレない、決める、責任をとる」ことがイクボスの役割となる。メールや会議の持ち方のヒントもとても参考になるものでした。最後に、部下との信頼関係とコミュニケーションがなにより重要であるとまとめられました。

令和2年度 性の多様性講演会「多様性な性って何だろう～互いの違いを受け止めあえる社会を目指して～」開催

令和3年1月5日、リモート講演として、群馬の唯一の支援団体「ハレルワ」の間々田久渚代表、黒澤由楓副代表をお招きし、性の多様性講座を開催しました。リモートの効果もあり、講義の学生も含めて254名の参加がありました。

ハレルワは平成27年に発足し、群馬県の当事者支援をはじめ、行政職員や学校での意識啓発に尽力してきました。全国都道府県で3か所目として導入された「群馬県パートナーシップ制度」にも触れながら、性のあり方について恋愛をする人もいればしない人もいる、好きになる相手のセクシュアリティを定めない人もいること。性自認や性的指向(SOGI)は、グラデーションであり、人はそれぞれ多様な性を生きていることが説明されました。そして、お二人のご自身の体験を語られたことで、よりSOGIについて身近に感じ、考えることができました。

最後に、差別的な言い方で揶揄することはいじめやハラスメントにも繋がる。同調して笑ったりしないことが安心につながる。伝えられたらしっかり話を聴くこと、どんな場面で困っているのかを知ること、秘密を守り広めないことを明日から始めてほしいと締めくくられました。

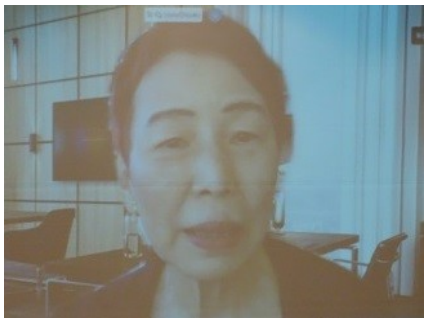


ダイバーシティ推進センター
設立記念シンポジウム開催

「ダイバーシティ推進センター設立記念シンポジウム−Beyond Borders 新たな連携の時代へ向けて−」を令和2年12月1日群馬大学ミューズホールにて開催しました。ダイバーシティ推進センターの設立を記念して、ダイバーシティとはなにか、大学としてダイバーシティ推進を行う意義はなにか等の共有を目的に、その意義に照らし、群馬大学学生支援センター、及び手話サポーター養成プロジェクト室の協力により、文字情報と手話による情報伝達支援を行いました。当日の参加者は212名（来場者54名、オンライン参加者158名）と、多くの方に興味を持っていただくことができました。

第1部は、二人の招聘講師によるオンライン講演で、まず東京大学大学院情報学環教授の吉見俊哉先生には、「第三世代の大学とは何か？―ポストコロナの大学論」を、続いて東京大学名誉教授の上野千鶴子先生には「男女共同参画は学問を変えるか？」についてご講演いただきました。お二人とも、これからの大学と教育の在り方について鋭く切り込まれ、吉見先生からは「大学とは、ノイズ発声装置として、人材を提供する場所である」、上野先生からは「男女共同参画とダイバーシティは別物、ダイバーシティをマイノリティのグループが集まった組織にしてはならない」という印象深いメッセージをいただきました。第2部のパネルディスカッションでは、「ダイバーシティとはなにか―群馬大学における現状と問題点」と題して、オンラインと対面のハイブリッド形式での対談が行われました。まず群馬大学のこれまでの活動について、ダイバーシティ推進センター長の工藤貴子教授、共同教育学部特別支援教育講座の金澤貴之教授、国際センター長の末松美知子教授が報告し、続いて招聘講師二人とダイバーシティ推進センター副センター長の長安めぐみ講師が加わりトークセッションが行われました。

事後アンケートでは、「多くの刺激・示唆をいただいた」や「ダイバーシティという言葉の中に何となく色々なことを収めてしまっていることの危うさに気づいた」など多くのご意見を頂戴できました。本シンポジウムをスタートラインとして、今後この内容が大学内の様々な機関に波及していくことを願ってやみません。



群馬大学ダイバーシティ推進宣言及び基本方針

群馬大学ダイバーシティ推進宣言

群馬大学は、地域に根ざしながら、二十一世紀を多面的かつ総合的に展望し、持続可能な開発目標（SDGs）の達成など地球規模の課題に挑むという使命を果たすため、全ての大学構成員がその能力を生かし、多様で先進的・創造的な教育研究を展開しています。研究及び学修環境の整備にも努め、平成25年度からの男女共同参画の取り組みを通して、女性研究者や若手研究者の育成に力を入れてきました。さらに、令和元年には「性の多様性に関するガイドライン」を策定し、性の多様性を尊重する取り組みを全学的に進めています。

群馬大学は、さらなる飛躍に向けて教育及び研究の一層の活性化と個性化を実現するため、性別、障がい、国籍、性的指向、性自認、宗教、年齢、価値観など、より広い視点でのダイバーシティを積極的に推進し、もって地域や国内外におけるダイバーシティ社会構築の一翼を担うことをここに宣言します。

令和2年11月　群馬大学長

群馬大学ダイバーシティ推進基本方針

「群馬大学男女共同参画基本計画」の基本方針を継続して推進するとともに、「ダイバーシティ推進宣言基本方針」を以下のとおり策定・実施します。

（1）　群馬大学は、すべての構成員に対して、ダイバーシティ推進への理解と、一人ひとりの違いを認め尊重しあうインクルージョン意識の醸成に努めます。

（2）　群馬大学は、ダイバーシティ社会の担い手を育成するために、多様な発想や視点からの研究の深化と教育の活性化を推進します。

（3）　群馬大学は、すべての構成員が、その個性と能力を最大限発揮できるように情報の共有、及び学内環境の改善を進めます。

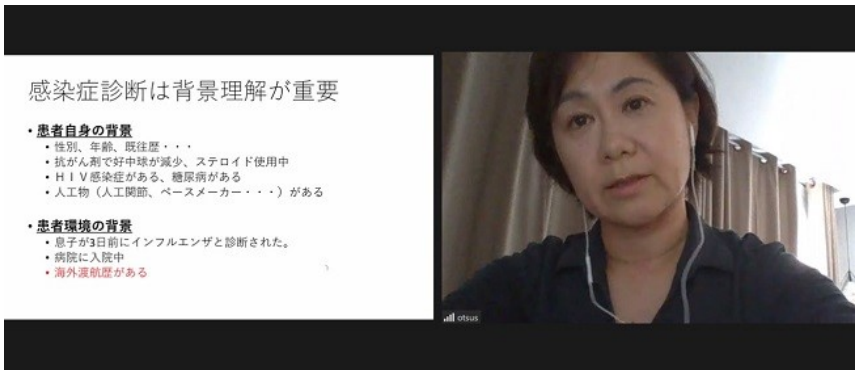
（4）　群馬大学は、大学の意思決定において、多様な構成員の意見を反映させるために体制の構築と定期的な見直しを行い、先進的かつ効果的な方策を展開します。

理工学部大学院進学を促す会 開催

令和2年11月11日、理工学部において主に学部3年生を対象に大学院進学を促す講演会を開催しました。講演者4名（社会人OG、教員、両立支援アドバイザー、現役大学院生）により、大学院に進学した動機やメリット・デメリット、研究内容、就職、仕事内容、仕事と家庭の両立などについての講演が行われました。

今年はコロナウィルス感染防止対策のためZOOMによるオンライン開催となりましたが、参加人数は昨年（86名）とほぼ同数の85名（学生72名、教職員13名）と盛況でした。また、オンライン講演のメリットとしてチャットによる質問も多く寄せられました。

アンケート結果では、本講演会が「有益であった」が約97%、「大学院進学の気持ちが強まった」「選択肢に入れてみようと思った」が約85%ありました。学生に進路やライフプランを考えてもらう良い機会になったと思います。今後も、学生にとって将来を考えるヒントになるようなイベントを企画していく予定です。

令和2年度
医学生・研修医等をサポートするための会 開催

令和2年12月16日、オンラインにて医学部医学科4年生を対象に、「医学生・研修医等をサポートするための会」を開催しました。講師としてWHOベトナム国事務所 疾患対策・健康危機対策コーディネーターの大津聡子先生をお招きし、「医者と赤十字とWHO：感染症と一期一会が紡いできた道」と題してご講演いただきました。大津聡子先生は当学医学部の卒業生であり、日本赤十字社の国際派遣のご経験もあり、現在は感染症コントロールを中心にWHOに勤務されております。「感染症は対岸の火事ではありません」「知らないこと、理解しないことは不安につながる、不安は差別につながる。」「『知識・判断・行動』の3つをつなげて考える」、「仕事に悩んだこともありますが、エキスパートよりプロフェッショナルでありたいと思っています」「日本人としての基盤を持っているからこそ、世界で働くことが出来る」。大津先生のご講演の中から、特に印象深かった言葉です。そして、「私は周りの人に恵まれていました」と何度もおっしゃっておりましたが、それはやはり大津先生が人々のいのちを守るために真摯に向き合ってきたからだと、ご講演を通して感じました。医学生・研修医ばかりではなく、医療人として多くのことを学ばせていただいた講演会でした。